

## 巻頭言

―秋風と獲り入れのなかに／祭りが来る／部落部落に、祭りが来る。

―笛太鼓の音がわたる／小川のふちの叢には／蜚草、みぞそば、赤のまんまなど／色とりどりの小粒花が／硝子のおはじきをばら撒いたように咲きみだれ／空いちめんに飛ぶ赤とんぼは／畦道をゆく着飾った人ひとの／頬にあたって羽音を立てる。

祭りだ／部落部落の秋まつりだ。

久保栄作『火山灰地』第二部、第六幕は、この朗読に導かれて幕が開く。“オトツブ神社”の境内には、ピラミッド状に積みあげたバナナや葡萄や林檎の叩き売りをする果物屋、セトモノ屋、墓口、守札入れを売る小間物屋、酸漿や金魚をも売る風船屋、口上みごとに墓の油を売る者…、“土に棲む”人々、“荒地の下から芽生える名なし草のように”生きてゆく人々…などで渦まいてゐる。

ここには確実に「広場」があった。久保栄流に言えば、そこに生きている人間たちのその“生きる喜び”と、“生きる呪い”が交差する「広場」があったと言えるだろう。

演劇もまた、創り出すものとそれを観るものの間に「広場」を形成していた。しかし、二一世紀に生きる私たちにとって、この「広場」は益々狭く、小さく、先細って、演劇を含めた地域に生きる伝統“文化”が、受け継がれ、発展させ、継承していく「場」が今や危うい―と思うのは私だけだろうか。

この小冊子は、北海道の演劇活動の諸事項を、受け継ぎ、発展させ、継承してゆく、小さな「広場」としてありたいとの思いから一〇年前に誕生した。そして今、一〇号をむかえる事となった。これを節目に、さらに“新たな広場”にしなければ…との思いを吐して、今号の巻頭言といたします。